

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530917

研究課題名(和文)中学生の暴力予防のための心理社会的ウェルビーイングに関する研究

研究課題名(英文)How psychosocial well-being for adolescents affect prevention of violence?

研究代表者

桜井 美加 (SAKURAI, Mika)

国土館大学・文学部・准教授

研究者番号：00406638

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中学生の暴力予防のために、心理社会的ウェルビーイング向上が怒りのコントロールスキルに及ぼす影響について明らかにすることである。第一に、思春期版心理的ウェルビーイング尺度と思春期版人間関係健康性尺度の作成を行い、信頼性、妥当性が確認された。次に心理的ウェルビーイングの程度が怒りの建設的反応に影響を及ぼすことがわかった。中学生の怒りのコントロールプログラム施行により中学生が怒り感情に建設的に反応するためのスキルは向上したが、それと併行して大学生によるメンタリングを行うことで、中学生の心理的ウェルビーイングが高まり、暴力予防のために信頼できる大人との関係が有効であることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The current study examines associations between adolescent psychological well-being and anger management skills in order to prevent adolescents' aggressive behavior. First, two indicators have been developed in order to assess psychological and social well-being for adolescents. They are the psychological well-being indicator-youth and relational health-youth indicator. Two of indicators were examined reliability and validity. Secondly, there were found that degree of psychological well-being affected positively anger management skills. At last, psychoeducation to learn anger management skills affected anger response in constructive ways, however there was no influence on psychological well-being. In addition to conduct anger management program at a school based, mentoring by college students may help those aggressive students to increase psychological well-being. As a result, psychological well-being took an important role for violence prevention for middle high school students.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：心理的ウェルビーイング 暴力予防 怒りのコントロール 中学生 メンター

1. 研究開始当初の背景

中学生の暴力予防のためには、攻撃性の高い中学生にいかん怒りのコントロールスキルを体得させ、それが維持されうるかという研究が求められる。しかし攻撃性の高い子どもには必ずしも暴力予防プログラムの効果が諸外国において (Valliant, Jense & Brook, 1995)、また日本においても (桜井, 2003) あまり見られない。そこで本研究では、「攻撃性の高い中学生が怒りを適切にコントロールするためにはどのような要因が重要となるか?」という課題について、彼らの心理的ウェルビーイング向上などの前提条件が存在し、またその条件を満たすために、メンタリングなど子どもにとって信頼できる大人との関係が重要となるとの仮説をたてた。

本研究では、心理的ウェルビーイングについて以下のように考える。Samman, E. (2007)の心理的ウェルビーイング尺度は自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000; 2001) に基づいて作成され、心理的ウェルビーイングは「自律」「有能感」「関係性」の3つの "Psychological needs" が満たされる内的な意図的活動であると考えられている (Hupper, F., Marks, N., Clark, A., Siegrist, J., Stutzer, A. & Vitterso, J., 2006)。またそれらの3つの心理的ニーズを満たすことでより良い人生へ導かれるといわれている (Frey & Stutzer, 2007, p15)。将来への展望の中で発達を遂げていく必要がある中学生にとって、幸福感をポジティブ感情や生活満足感のみで測定するのではなく、望ましい心理的発達という観点から心理的ウェルビーイングの特性を定義していると思われる。そこで本研究では、自由に自発的に決定する力を示す「自律」、自分が達成しようとしていることに有能感を持つ力を示す「有能感」、周囲の人と良好な人間関係を築く力を示す「関係性」の3つの心理的ニーズが満たされるような状態を心理的ウェルビーイングと定義する。

2. 研究の目的

本研究は、1. で述べた仮説を検証するために、以下の3つの目的で研究を行った。

- (1) 中学生版心理社会的ウェルビーイング尺度の開発、信頼性、妥当性の検討。
- (2) 心理社会的ウェルビーイングと怒りのコントロールの因果関係におけるモデル構築。
- (3) 心理社会的ウェルビーイング向上により、怒りのコントロールを高める、心理的介入プログラムの作成とその効果検討。

3. 研究の方法

2. で示した3つの目的を明らかにするために5つの研究を行った。5つの研究の各方法について、以下に示す。

<研究1>

調査協力者：アメリカのカウンセラー11名
調査方法：1対1の面接形式で半構造的インタビューを行った。インタビューでは、「攻撃性の高い子どもにはどのような背景や原因があり、どのような介入やアプローチが成功であったもしくは失敗であったと考えるか」などについて尋ね、会話記録については録音をし、逐語記録を作成した。

<研究2>

思春期の子どもの心理社会的ウェルビーイングを測定するために、人間関係健康性尺度と、自己決定理論をベースとした思春期版心理的ウェルビーイング尺度の作成を試みた。調査対象者：首都圏公立中学校に在籍している、1年生157名、2年生146名、3年生176名、計479名。

調査方法：質問紙を各クラスで担任教諭より配布し、回収した。

質問紙構成：Relational Health Indices-Youth (Liang et al., 2010) (以下 RHI-Y とする) は、親しい友人関係、大人のメンターとの人間関係、グループやコミュニティ活動における人間関係について測定できることから、日本の中学生の学校内外における大人との関係も含めた人間関係を測定することで、多様な人間関係のありかたを明らかにすることが期待される。RHI-Y の著者から直接日本語訳の許可を得たことから、日本語版を作成した。

RHI-Y を筆者が日本語訳し、親友との関係12項目、メンターとの関係16項目、グループ内での人間関係14項目から、それぞれ3項目ずつ日本人中学生が回答しやすい項目を選んで使用した。「親しい友だち」については、共通の話題や趣味を分かち合える人、お互いに困った時には助け合える人との関係を、「メンター」というワーディングは日本人中学生にわかりにくいことが懸念されたため、「もっとも信頼できる大人(親以外)との関係」に訂正し、所属するグループについては、学校のクラス、地域のクラブ、おけいごと、部活動などとの関係を示すと教示し、それに続いて質問項目に回答させた。「いつもそうである」を1点、「まったくない」を5点とし、5件法で回答を求めた。本尺度を、思春期版人間関係健康性尺度と呼ぶことにする。

質問紙構成：Samman (2007) の Indicators of Psychological and subjective well-being を日本語訳した。本尺度は「自律性」3項目、「有能感」3項目、「関係性」3項目から構成されており、「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の7件法で回答を求めた。

質問紙構成：

Stephen, S. L., Cassano, M., MacEvoy, J. P. & Costigan, T. (2010) が作成した "A Knowledge-Based Measure of Social Information Processing and Anger

Management”を日本語訳した後、調査協力校の校長や教諭と日本人中学生にとって適切な質問内容を選んだ。読んでいて攻撃性を刺激されるようなものは避け、中学生にとって怒りのコントロールを学習できるような内容4項目を選んだ。各質問項目には「このような場面ではあなたはどのようにふるまうか？」と尋ね、4つの選択肢から1つの回答を選択させた。各質問項目で正解に相当するものを1つ入れて、その問題を回答すれば得点が得られるようにした。

質問紙 構成：桜井(2004)が作成した簡略版怒り反応尺度から、怒りに建設的に反応する項目のみ10項目抽出し、「最もあてはまる」から「最もあてはまらない」の5件法で回答させた。

<研究3>

調査対象者：首都圏公立中学校に在籍している、1年生157名、2年生146名、3年生176名、計479名。

中学生が経験する怒り感情に伴う反応や、怒り感情コントロールの知識と、自己決定理論をベースとした心理的ウェルビーイングとの関連をみる。思春期版心理的ウェルビーイング尺度で得られた「関係性」「有能感」「自律」の3因子を独立変数とし、思春期版人間関係健康性尺度で得られた「友人関係」「メンターとの関係」「グループでの関係」の3因子を従属変数とし、分散分析を行う。また思春期版人間関係健康性尺度の「メンターとの関係」を独立変数、思春期版心理的ウェルビーイングを従属変数とした、分散分析を行う。さらに、それぞれの結果から得られた因果関係をもとにモデル構築を行う。

<研究4>

中学生を対象とした、怒りのコントロールプログラムを作成し、道徳の時間などを活用し、1回45分で3回プログラムを実施した。

調査対象者：首都圏公立中学校に在籍している、2年生87名。

怒りのコントロールプログラムの構成：

第1回目：怒り感情を経験することはノーマルなことであり、様々なコントロール方法があるが、最初にリラクゼーションを試み、心身ともに落ち着くということが重要であることを学習させる。

第2回目：攻撃型、非主張型、アサーティブ型の3パターンの怒り反応について学習させる。

第3回目：アサーティブな表現方法を脚本作成を用いて学習させる。

効果測定：建設的怒り反応尺度、怒り感情知識尺度、思春期版人間関係健康性尺度、および思春期版心理的ウェルビーイング尺度を、怒りのコントロールプログラムの実施前と後に担任教諭より学級で配布し回収した。

<研究5>

中学生への心理的ウェルビーイング向上のために、大学生ボランティアによるメンタリングプログラムを作成、実施し、その効果について大学生ボランティアへのスーパーヴィジョンや個人面談の逐語記録を分析した。

4. 研究成果

<研究1>

アメリカの11名のカウンセラーを対象としたインタビュー調査の内容をまとめると、思春期の子どもに怒りのコントロールを学習させる上でモチベーションを高めるためには、カウンセラーとの信頼関係を構築することが重要であることがわかった。同時に、若手のメンターが派遣され課外活動を一緒にしたり相談相手になることで、子どもの心理的ウェルビーイングが高まり、怒りのコントロールの学習の動機づけが高まる可能性があることも示唆された。

このことから、怒りのコントロール学習の動機づけを高めるための前提条件として、心理的ウェルビーイングの向上が想定されること、また心理的ウェルビーイングの向上のためにはメンターなど保護者や教員以外の信頼できる大人との関係などが寄与することが示唆された。

<研究2>

中学生の怒りのコントロールと心理的ウェルビーイングとの関連をみるためには、適切な尺度開発が必要である。本研究では、以下2つの尺度を作成した。

1. 思春期版人間関係健康性尺度作成：

SPSS version21 を使用し9項目に対し因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。固有値の推移から、3因子が妥当とされた。係数を求めたところ、「親友との人間関係」が.826、「メンターとの人間関係」が.804、「グループ内の人間関係」が.874であった。性別と学年を独立変数、「親友との人間関係」「メンターとの人間関係」「グループ内での人間関係」を従属変数とし、分散分析を行ったところ、性別、学年間で有意差は見られなかった。基準関連妥当性検証のため、心理的ウェルビーイング尺度の「関係性」と思春期版人間関係性尺度との相関を求めたところ、 $r=.52$ であった。

思春期版人間関係健康性尺度の信頼性を検討したところ、係数が十分な値が得られたため、本尺度は日本人中学生の人間関係をある程度測定しているといえる。また、基準関連妥当性においても関連する因子と正の相関がみられたことから、一部妥当性も認められた。性差は有意差がみられなかった。これは、アメリカにおける調査で、親友との関係では女子のほうが男子より平均値が高く、グループ内での人間関係では男子のほうが女子より平均値が高い結果と異なる。日本人中学生の場合、女子にとってもグループ内での

人間関係は重要視され、男子も親友のような親密な二者関係を求める傾向があるからと思われる。思春期版人間関係健康性尺度の3因子の平均値を比較すると有意差がみられ、「親友との人間関係」が最も高く、次いで「グループ内での人間関係」で、「メンターとの関係」が最も高く、日本人中学生にとって、親以外の最も信頼できる大人の存在が稀薄であると推測される。

2. 思春期版心理的ウェルビーイング尺度：「自律」「有能感」「関係性」の3変数を用い Amos21 による共分散構造分析を行ったところ、適合度は $GFI=.910$ 、 $AGFI=.832$ 、 $CFI=.586$ 、 $RMSEA=.121$ 、 $AIC=231.259$ で高い値を示している。3 因子のそれぞれの因子間相関は、自律と能力が $.754$ 、自律と関係性が $.796$ 、能力と関係性が $.971$ であった。これらのことから思春期版心理的ウェルビーイング尺度は信頼性が確認された。

<研究3>

心理的ウェルビーイングの3因子を独立変数とし、怒り建設的反応、怒り感情知識、人間関係健康性尺度のうち「友人との関係」、「メンターとの関係」、「グループとの関係」を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、心理的ウェルビーイングの「有能感」が、怒り建設的反応($\beta = .220$)、怒り感情コントロール知識($\beta = .176$)、メンターとの関係($\beta = .208$)に、それぞれ有意に影響を及ぼすことがわかった。次に、心理的ウェルビーイングの「関係性」が怒り建設的反応に($\beta = .164$)、「グループとの関係」($\beta = .487$)、「メンターとの関係」($\beta = .347$)、「友人との関係」($\beta = .456$)に、それぞれ有意に影響を及ぼすことがわかった。最後に心理的ウェルビーイングの「自律」が、グループとの関係($\beta = .109$)、友人との関係($\beta = .119$)に、それぞれ有意に影響を及ぼすことがわかった。これらの因果関係から導きだされるモデル図を Figure 1 に示す

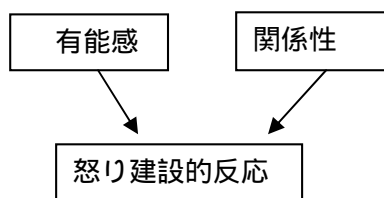


Figure 1 中学生の心理的ウェルビーイングが怒り反応に与える影響モデル図

次に、メンターとの関係を独立変数、心理的ウェルビーイングを従属変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行ったところ、心理的ウェルビーイングのうち「有能感」($\beta = .205$)、「関係性」($\beta = .280$)にそれぞれ有意に影響を及ぼすことがわかった。

これらの因果関係から導かれたモデル図を Figure2 に示す。

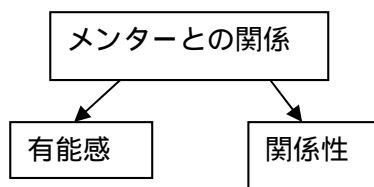


Figure2 中学生のメンターとの関係が心理的ウェルビーイングに与える影響モデル図

<研究4>

怒りのコントロールプログラムを3回実施した。プログラム実施前後に、自己報告式質問紙を配布し、プログラムの効果を測定した。その結果、怒りを感じたときにどのように反応するかについてのスキルが授業前より授業後のほうが平均値が高くなった。

怒りのコントロールの知識を測定する尺度(状況によりどの選択肢を使うのが適切であるかを問う質問)では、授業前と授業後とは特に効果は見られなかった。しかし女子生徒のみについては効果がみられた。

女子のみ、怒りのコントロールの授業後のほうが親友および仲間との人間関係がより親しくなった。

心理的ウェルビーイングについては、自律性が女子生徒のみに怒りのコントロールの効果が示された。

怒りのコントロールプログラムは、男子より女子のほうがより効果が示された。また女子生徒については人間関係や、「自分で決定する」などの自律性が高まることがわかった。しかし男子生徒については、心理的ウェルビーイングに差がみられず、集団式のスキル学習のみでは、怒りのコントロールを学習することが難しいことがわかった。

<研究5>

研究4までの経緯より、中学生の心理的ウェルビーイングは怒りのコントロールと関連していることがわかったが、研究4の怒りのコントロールプログラムに加えて、中学生の心理的ウェルビーイングが高まるような介入が求められる。そこで、首都圏私立大学のボランティア学生5名を派遣し、ボランティアの学生を対象にスーパービジョンなどの面談を行った。その記録を分析した結果、メンターによる中学生への個別のかかわりは、学業をサポートするなど学習意欲を高めたり、学校生活が快適になるように援助するが、同時に健康的な人間関係を生徒と持つことで生徒の心理的ウェルビーイングを高めることも期待され、ポジティブな介入であることが示唆された。

結論

本研究で行われた5つの研究より、3つの

目的および、仮説についての検討が行われた。

まず第1の目的である、思春期のウェルビーイングを測定する尺度が作成され、信頼性、妥当性が確認された。

第2の目的である心理社会的ウェルビーイングと怒りのコントロールにおいては、因果関係が示され、モデル構築を行った。

第3の目的である、心理社会的ウェルビーイング向上により、怒りのコントロールを高める、心理的介入プログラムの作成とその効果検討については、大学生ボランティアによるメンタリングプログラムを作成し、このような介入により中学生の心理的ウェルビーイングの向上に寄与することがわかった。

これらのことから、「攻撃性の高い中学生が怒りを適切にコントロールするためにはどのような要因が重要となるか？」という課題について、彼らの心理的ウェルビーイング向上などの前提条件が存在し、またその条件を満たすために、メンタリングなど中学生にとって信頼できる大人との関係が重要となるとの仮説は、ほぼ支持されたといえる。

引用文献

- Liang,B. 2010 The Relational Health Indices for Youth:An Examination of Reliability and Validity Aspects. Measurement and Evaluation in Counseling and Development,42,255-274.
- Leff,S.S.,Cassano,M.,MacEvoy,J.P. & Costigan,T. 2010 Initial Validation of a Knowledge-Based Measure of Social Information Processing and Anger Management Journal of Abnormal Child Psychology,38,1007-1020.
- Samman,E. 2007 Psychological and Subjective Well-being:A Proposal for Internationally Comparable Indicators. Oxford Development Studies,35,(4),459-486.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 桜井美加 2014 大学生メンターが経験する中学校におけるメンタリング - 中学生の心理的ウェルビーイングへの影響 - 国土館人文学会,4,1-28. 査読有り
2. Mika Sakurai 2014 Development the Program of Anger Response in Smart and Positive ways-Youth in School Settings. 国土館大学教育学論叢,31,51-70. 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 桜井美加 2013 思春期版人間関係健康性尺度作成の試み 第 46 回日本カウ

セリング学会大会,p9.

2. Mika Sakurai 2014a Development of Japanese version of psychological well-being indicator. Asian Psychological Association 5th Conference. Keisen University, Tokyo,Japan.
3. Mika Sakurai 2014b Japanese adolescents' psychological well-being : The implications for effective evidence-based approach at school settings. "How connectedness to friends and mentors can promote psychological well-being among Japanese adolescents." The 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France.

〔図書〕(計 3 件)

1. 桜井美加著 山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生編 金子書房 世界の学校予防教育 第 I 部 学校における予防教育の必要性 第 2 章 予防教育の目標、理論、方法の多様性 2. 理論,方法の多様性 (3) 予防教育のベースとなる理論(e)社会的情報処理理論,12 頁、第 II 部 世界の予防教育の現状 第 3 章アメリカ・カナダの予防教育 4. 学校心理士や教師が選択する独自のプログラム (5)学校生活関係性攻撃予防・介入プログラム (PRAISE) 12 頁、2013 年
2. 桜井美加著 ナカニシヤ出版 中学生のための怒りのコントロール心理教育プログラムの開発 2013 年 216 頁
3. 桜井美加著 渡辺弥生・榎本淳子編 ナカニシヤ出版 発達と臨床の心理学 第 8 章児童虐待と発達障害担当 2012 年 22 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
桜井 美加(SAKURAI, Mika) 国土館大学・
文学部・准教授

研究者番号：00406638

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()